Japan Money

ジャパンマネーの内幕

世界的規模をほこる日本金融界にあいつぐスキャンダルは，はからずも日本経済の不透明さを物語る。実務に精通した経済学者が，データを駆使して金融大国の内幕を徹底的に解剖する。

中尾茂夫 著

岩波書店

Japan Money

ジャパンマネーの内幕

世界的規模をほこる日本金融界にあいつぐスキャンダルは，はからずも日本経済の不透明さを物語る．実務に精通した経済学者が，データを駆使して金融大国の内幕を徹底的に解剖する

中尾茂夫 著

岩波書店

ジャパンマネーの内幕

一九九一年一〇月二三日　第一刷発行©

定価二七〇〇円
（本体二六二一円）

著者　中尾茂夫

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話　〇三-三二六五-四一一（案内）

印刷・理想社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002687-9

ジャパンマネーの内幕

装幀／戸田ツトム＋岡孝治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序　章　砂上の「大国」 1
第Ⅰ章　論争＝ジャパンマネー 11
1　はじめに 13
2　ジャパンマネー脅威論 17
3　「競争・協調」論 30
4　国際政策協調論 44
5　日本沈没論の登場 60
6　小　括 72
第Ⅱ章　「又貸し国家」＝日本 75
1　問題の所在――ギルピンの問題提起 77
2　経常収支の推移 86
3　長期資本収支 110
(1)　海外証券投資 110／(2)　海外直接投資 126
(3)　長期負債内訳 131
4　金融勘定と為替相場 146

5　国際通貨ドルと通過勘定円　166
(1)　決済通貨ドルの構造　166／(2)　通過勘定円の構造　177

第Ⅲ章　邦銀は世界の脅威か？——191
1　問題の所在——「含み益」依存の破綻　193
2　二つの邦銀論　198
(1)　D・ヘイルの「邦銀独占説」　198／(2)　H・テレルの「統計過大説」　207
(3)　小　括　219
3　邦銀のグローバリゼーション　224
(1)　全体の概観　224／(2)　在米邦銀の展開　225
(3)　香港金融センターの拡大と日本　234／(4)　ロンドン金融市場と邦銀　243
4　米銀の赤字と邦銀の黒字　252
(1)　概　観　252／(2)　大手米銀の赤字決算　263
(3)　邦銀の損益分析　270

終　章　マネー社会が残したもの——287

あとがき

序章

砂上の「大国」

問われる債権大国ニッポンのディスクロージャー．不透明なベールは脱げるか？　（写真提供：毎日新聞社）

周知のごとく、一九八五年秋のプラザ合意を契機に円高は大きく進展した。それにつれて、「債権大国」「金融大国」、あるいは「パクス・ジャポニカ」「パクス・ニッポニカ」といった名称がジャーナリズムを賑わせ、これらは、日本社会のいわば大国意識をくすぐる結果となったのである。

片や現実においても、世界の銀行ランキングでは邦銀が上位を独占し、米国債入札では日本の機関投資家(生保・損保・信託・銀行等)が、また国際的な美術品のオークションでは日本人バイヤーが、いずれも衆目を集め、さらに、ニューヨーク、ロスアンゼルス、ハワイといった世界の不動産市場でも、ジャパンマネーのプレゼンスぶりは目を見張るものがあった。海外に居住する日本人ビジネスマンや海外旅行者の数もうなぎ上りに増大し、ニューヨーク・ウォール街やシカゴ・ラサール街では多くの日本人金融マンが多忙をきわめ、春三月ともなるとニューヨーク五番街やワシントンDCのジョージタウンは卒業を間近に控えた日本人大学生で溢れかえった。

ところが、一九九〇年に入るやいなや、一転して日本の株価の暴落が相次ぎ、日本の株価はけっして下がらないという、それまでのいわゆる「株価神話」は崩壊した。また、同年夏のイラクによるクウェート侵略に端を発した湾岸危機、さらに九一年初頭、戦争に突入するといった一連の推移のなかで、わが経済大国日本はいかなる役割を果たしたか。米国の政治的ヘゲモニーが復活するかのごとき

様相を呈するなかで、日本政府は、世界に対して意味ある独自のメッセージをなんら表明できないまま終始し、またまた、「経済は一流、しかしながら、政治は三流」という印象を強める結果となってしまった。この経済と政治のコントラストを表わす言葉は、通常「しかしながら」という接続詞とともに用いられがちだが、逆に、政治が三流だからこそ経済が一流になりえたととらえる方が、現実に即していないだろうか。いや、そもそも経済はそれほど一流なのであろうか。政治と経済は相互に反映し合うはずであり、当然、政治の遅れもなんらかの経済構造が生み出したものにほかならない。

八〇年代後半に明るみに出たリクルート・スキャンダルひとつをとっても、それは創業者の個人的キャラクターに還元できるものではなく、政・財・官の上層部がキャピタル・ゲインというマネーを媒介にしていかに深く癒着しているかが露呈され、日本の株式市場が容易に「犯罪」と関わりやすい構造を有していることを明らかにした。九一年春に明るみに出た野村、日興の二大証券会社の大口顧客への損失補てん問題、さらには暴力団との癒着といった事態は、「戦後の証券史上、最大のスキャンダル」(『朝日新聞』社説、九一年七月一〇日)であると同時に、監督責任を負う大蔵省の大きな汚点でもある。これらの場合、遅れているのは、政治なのか経済なのか。少なくとも、経済が一流で政治は三流だという即断はできそうにもない。

一方、国民一般の意識の方はどうなっているだろうか。「黄金」の六〇年代のナツメロ・ソングや、パクス・トクガワーナと称する明るい江戸時代論まで、まさに国際化に逆行している、といえなくもない。国際化を強要する外圧の風が吹きまくることへの反動、あるいは反発として、鎖国によって外

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

圧から遮断されていた江戸時代へのノスタルジーが掻き立てられるのであろうか。つまり、日米摩擦がもたらした批判されることへの疲労感が日本社会全体を漠然と覆っているために、自己批判の文化的伝統に欠ける日本では、それは、容易に「後ろ向きのナショナリズム」[1]に転化しやすい。まさに丸山真男が「歴史意識の古層」[2]と名付けた現象である。しかも、健康的で力強いパースペクティブが失われ、頽廃的、刹那的なイメージがメディアによって大量に再生産されるなかで、人権とか民主主義というような人間の根幹に関わる言葉のもつ魅力と迫力が失われていく。そういう社会的雰囲気のなかでは、我慢する努力だけですり減ってしまう「摩滅感」という気分が人びとに醸成されているのではないかという藤田省三の指摘[3]には首肯できるものがある。

このような日本経済の構造を、国際化の著しい現代において、総体として解明しようとするとき、国際金融市場におけるジャパンマネーの地位、換言すれば、八〇年代にグローバル化を著しく加速させたジャパンマネーの経済的背景を構造的に分析することは必要不可欠であろう。なぜならば、日本経済の今日的特徴は、以前のいわゆる貿易偏重から金融の比重がきわめて大きいマネー経済の様相を強めているし、海外進出に際しても、以前の総合商社主導型から邦銀や生保のような金融機関が国際化の先頭を走る時代へ変化しつつあるからである。[4]では、どのような視角からジャパンマネー論を築くべきか。本書全体を貫く問題意識を三つ指摘したい。

第一に、日本経済の構造把握には国際金融論的分析が不可欠になっているにもかかわらず、日本経済の対外金融関係の情報は驚くほどに僅少であり、そのために国内の情報・資料だけでは分析が深ま

りにくい。逆に、海外からの資料やデータによって日本の位置がみえるという状況にある。たとえば日本が銀行間取引でどれほどの負債をロンドンに負っているのかは日本の資料からはわからず、イングランド銀行のデータから描かなければならないし、同様に、日米の銀行間取引の実態にしても日銀データからではなくＦＲＢ（米連邦準備制度理事会）の資料に依存せざるをえない。個別企業データでは、米銀やヨーロッパ系銀行の『アニュアル・レポート』と邦銀の『有価証券報告書』のディスクロージャー（情報開示）の程度の相違はきわめて大きい。

このような情報ギャップはわれわれが一見過剰な情報の渦のなかで暮しているようにみえながら、それがある面では錯覚でしかないことを教えてくれる。著者は八九年から九〇年にかけてシカゴ、ワシントンＤＣに滞在したが、ニューヨークのある日本人新聞記者に直接聞いた情報収集の日米比較に興味をもった。かれによれば、日本での方が情報を入手しやすいという。なぜなら、米国ではたとえばニューヨーク連銀総裁のコメントをとろうとすればニューヨーク連銀でのプレス発表に頼るしかないが、日本では日銀総裁の自宅前で帰宅を待ってコメントをとれるからだとかれは指摘した。これははからずも日本社会における情報の閉鎖性を示していて面白い。なんらかの人的コネクションをもつ特定の者は当該情報を入手しうるが、そうでない者にとっては情報不足は決定的である。議会にしろ官庁にしろ膨大な資料・情報がだれに対しても公開されることを基本とした米国の状況とは異なり、日本における国際金融関連データのディスクロージャーの現状はまことにお粗末きわまりない。海外の資料・データを使うことによってしか日本経済の対外金融事情の詳細を描くことができないという

のはなんとも皮肉である。[5]

第二に、そのような情報ディスクロージャーが遅れる背景には、われわれ国民一般の知識意欲の疲弊(「知る権利」意識の後退)があるのではないだろうか。あまりにも刹那的、頽廃的な情報に満ち満ちているがために健全で必要性に富んだ情報に一般の好奇心が届きにくく、それによって人びとの批判精神が衰弱してしまっているように感じられる。企業だろうが学校だろうが、あるいは、政治的立場の如何を問わず、内部からの組織批判は一種のタブーであり、批判すればするほど排除されがちになるという傾向は日常よく経験するところであろう。日本社会で無条件に尊ばれがちないわゆる《和》イズムとは、そのような内部批判をタブーとした集団主義の所産なのである。[6]

興味深い例として、米国で読んだ『イソップ物語』が思い浮かぶ。犬が川に映った自分の影に吠えて骨を川に落としてしまうという馴染み深い話について、著者の手元にある日本語訳の注釈にはわざわざ「お子さまが欲ばったときに、話してあげてください」[7]とある。しかし同じ話から汲み取るべき英語版の教訓は「本質を見失うべからず」であり、タイトルも「犬と影」となっている。[8]往々にして、われわれ日本人は、文句をいわず黙ってがんばることを必要以上に美徳として教育された結果、本質を見失っているのかもしれない。その意味において、欧米の資料で補強しながらジャパンマネー像を描けば、日本の公的データでは見落としがちな日本経済の意外な構造を発見できるのではないかと著者が考える所以である。

第三に、「知る意欲」を疲弊させるもうひとつの背景には、オイル・ショック、円高ショックを乗

り切ってきた猛烈な労働生産性の上昇と超長時間労働がある。なぜならば、効率競争社会こそが未来や人間の生き方について考える時間とゆとりを人びとから奪ってきたからである。[9] 労働生産性の上昇と賃金コストの低下が日本の輸入購買力の伸び悩みを規定し、したがって日米貿易摩擦の最大の要因であると、ブルッキングス研究所客員研究員であるエドワード・バーンスタイン(Edward M. Bernstein)は喝破した。[10] 九〇年六月に著者がある電器メーカーの工場見学をした際、八五年の円高以降製品コストを半分に削減できたことの背景には倍化された労働生産性があり、それはベルト・コンベアーの速度を二倍にすることによって達成されたという説明を聞いた。消費ブームの陰にある経済大国＝日本の「意外に」暗い一面は日本社会における生存競争の厳しさの所産にほかならない。それはよきにつけあしきにつけ「がんばれ」一辺倒の日本人の古き精神主義とまさしく符合するものである。「沈黙は金」「長いものには巻かれよ」あるいは「出る杭は打たれる」といったプリ・モダンな哲学が優先し「周りに合わせる」横並び意識を支配的行動原理とする日本社会は、近代的合理主義に基づいた個人主義的精神からは二一世紀を目前にした今日でもいぜんとしてほど遠い。しかしながら、これだけ地球が狭くなり、国際的な交流がひんぱんになってきた現代において、ひとり日本社会だけが孤高を保つことはできないだろう。合理的精神の確立のためには、情緒ではなくデータによって、気分ではなく科学的分析によって、構造を把握することが必要である。

ジャパンマネー論が今日の日本経済社会の全貌をつかむ有力な鍵になりうるのではないか、と考える著者の問題意識は以上である。まず、実際のジャパンマネーをめぐる海外の論調をフォローし(第

Ⅰ章)、貸し手であるとともに巨大な借り手でもある日本経済を「又貸し国家」と規定した(第Ⅱ章)。ここで、国際金融・資本市場における日本の借り手の部分を強調したのは、あまりにも日本の資本輸出国としての貸し手の側面ばかりが強調されがちな従来のジャパンマネー論に著者が懐疑的で、借り手と貸し手の双方を総合的に分析することで初めて構造が明らかになる、と考えるからである。第Ⅲ章では、米国における代表的邦銀論を検討した後、邦銀のグローバル化の現状をデータによって確認し、邦銀の低収益構造と国際競争力の関係を分析した。そこで得た邦銀の顕著なイメージは、コンピュータ化の進展と女性の派遣労働者の増大という「意外な」事実であった。ここには、全盛をきわめるかのようなジャパンマネーを支える裏側に、華やかなモダンあるいはポスト・モダンと、遅れたプリ・モダンの共存という日本社会に共通する歴史的問題を見出しうる。同時に、株式の含み益に依存した邦銀経営の「前近代性」に対して警鐘を鳴らした。終章では、マネー全盛という時代の論理が生み出した日本社会事情を素描することによって、問題の広がりを指摘している。

(1) 拙稿「日米摩擦と江戸ブーム」西川潤・森田桐郎編『いま世界政治経済が面白い』有斐閣、一九九〇年、一〇八頁。

(2) 丸山真男「歴史意識の『古層』」『日本の思想 第6巻 歴史思想集』筑摩書房、一九七二年、同「原型・古層・執拗低音」加藤周一・木下順二・丸山真男・武田清子編『日本文化のかくれた形』岩波書店、一九八四年。

(3) 藤田省三「現代日本の精神」『世界』一九九〇年二月。

(4) 日本経済の海外投資の特質を総合商社主導型ととらえられるかどうかについては論争がある。杉野幹夫

『総合商社の市場支配』大月書店、一九九〇年、および佐藤定幸『多国籍企業の政治経済学』有斐閣、一九八四年参照。

(5) たとえば、一九八八年一二月に開催された東京大学経済学部主催のコンファレンスにおいても、国際金融に関連する日本の公表データが少なく、もっとディスクロージャーがなされなければならないという意見が著者も含めて多くの研究者からなされた。拙稿「国際金融市場をどう見るか」石見徹・伊藤元重編『国際資本移動と累積債務』東京大学出版会、一九九〇年、二三〇頁。

(6) それに関しては、Robert Whiting の *You Gotta Have WA*, Macmillan, 1989(玉木正之訳『和をもって日本となす』角川書店、一九九〇年)が野球の日米比較の形で日本社会を理解するキーワードとしての《和》について縦横無尽に論じていて刺激的である。

(7) 『保育絵本一五イソップのおはなし』小学館、一九七一年。

(8) *Aesop's Fables*, Grosset & Dunlap Publishers, 1988, p. 176.

(9) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波新書、一九八九年、一四頁。

(10) Bernstein, Edward M., "How Japan Can Reduce Its Huge Trade Surplus", *New York Times*, 14, 1990.」の見解をめぐる論争については、拙稿「日米摩擦の深層(下)『ユニフォーム・キャピタリズム』を脱ぎ捨てよ」『エコノミスト』一九九〇年六月一九日、を参照されたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com